

---

# 新説アンパンマンTRANSIENT

ぽぽすみす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新説アンパンマンTRANSCIENT

### 【Nコード】

N7869A

### 【作者名】

ぼぼすみす

### 【あらすじ】

あの大戦から三年　ガラパゴス諸島で新事業に成功し、平和に暮らしていた邪夢達一行は再び戦火に身を投じることになった。記憶を消された彼らに何が起こったのだろうか。その頃、謎の白づくめ集団『スカラー教』を名乗る組織が水面下で着々と計画を実行へと移す準備を進めていた。またもや地球、いや、宇宙の未来を悪い方向へと導いてしまうのだろうか・・・

## アンパンマンTRANSIENT 01 (前書き)

注意!!

この話は続編となりますので、御覧になられて無い方は過去のシリーズからどうぞ!!!

前作『新説アンパンマン』

<http://syosetu.com/pc/main.php>

[?m#w1-4&amp;ncode=N5707A](http://syosetu.com/pc/main.php)

前々作『アンパンマン伝説』

<http://syosetu.com/pc/main.php>

[?m#w1-4&amp;ncode=N5214A](http://syosetu.com/pc/main.php)

時は西暦という概念が無くなっている時代、君達の『今』からみれば、多少未来のことである。

あの大戦のことは軽く話したと思うが、あれでは万人の記憶が消されたはずになっていた。

なぜ今私がここで話すことができるのか考えたことはあるだろうか？

私が宇宙保全理事局のmemberだから？

いや、それはさして重要なことではない。

矛盾の発端はあの大戦の直後から始まっていた。

具体的に言つと、記憶を消される事なく全てを知つたままの奴が存在したのだ。

そやつの名前は・・・確かTom Battalionだったような気がする。

彼の勉学に対する素質はアリストテレスを遥かに凌ぐと言われ、弱小五歳にして十元連立非線形偏微分方程式の厳密解を出したという。

要するに単なる天才少年でなく、『亀』レベルなのだ。

彼は数多くの法則（主に物理学である）を発見したが、自分と比べたら低レベルなこの社会にこれらの法則を発表する価値もないと考

えた。

十歳にして戦艦「アルティメイト」を設計、六年後には900億ドルの船の責任者になっていた。

戦隊ものやガンダム系を視聴している時に、造れるんじゃない？と思っただけで、それが計画の大本だという。

世間には知られたくない一心でスカラー教と偽り、教祖はMaster Battalionとしたが（そのあなた！Masterと勘違いしてないかい？）、誤解を招くため信者はMasterと呼ぶことにした。

そして、アホっぽく白づくめにし、

「電波がああああああ！！！」

とか叫び・・・そんなくだらない宗教団体は思惑通り世の中から忘れ去られた。

なにせ本拠地が人里離れたガラパゴス諸島だしね。

しかし、今回のポイントはここにある。

アルティメイトがガラパゴス諸島地下施設で造られていたことだ。

それは製造が始まりちょうど三年たったある日のことだった。

アンパンマンTRANSIENT 01(後書き)

作者の物語ブログ、『ごっどおぶぽぼす!』も良かったら御覧ください!!!

<http://blog.crooz.jp/usr/azaz/>

## アンパンマンTRANSIENT 02

「Master!! 偵察カメラに人影が!!! いや・・・性格には人ではありませんが・・・アンパンマンとその他もろもろ、バイキンマンとその他大勢が集結しています。」

「(Tom) ん? バイキンマンが居るということは計画が漏れたわけではないな。となると・・・まあ、一先ず状況維持としようか。録画を最高画質にしといてくれ。」

「(副長) イエッサー!! 基地周辺の1カメラから43カメラまで最高画質に設定!!!」

わかっていただけだろうか?

あの大战、実は宇宙保全理事局の他にTomにも監視されていたのだ。

そして、宇宙保全理事局はその存在を見抜けていなかった。

「はあ? こんな大勢でこんなところまで来て『あっち向いてホイ』かよっ!!!」

1時間後

「(Tom) なにい? 今度はボーリング大会か? ふざけ……………  
おお、奴らなかなかいい戦術を使うな……………」

しばらくして

「(Tom)とうとうゲリラ戦へと発展したか・・・一見アニメと同じっぽいような気もするが、明らかに地球にはない技術があるな・・・なぜだ?」

「Master!!ドキンがいるあたりから巨大なエネルギーを確認!!これは・・・nuclearです!!」

「(Tom)なんてこつたい!!しかああああし、真上にnuclearが直撃してもびくともしない設計なのである!!!ガハハハ・・・」

「イジヨウジタイハツセイ!ジュウビヨウゴニシセツハコツパミジンニナリマス」

突然、スーパーコンピューターの『パパドゥ』が警報を発した。

「(Tom)ちょ、ちよつ、ちよつと待て!nuclearぐらい大丈夫なはずじゃ・・・」

「5、4、3・・・」

「(一同)うわあああああ!!!!」

・・・

「(Tom)・・・あれ?何も起きないのか?管制、何があつた!?」

「この世のものとは思えない莫大なエネルギーが局所的に発生、当施設の耐力を大幅に超えており、消滅の危機があつた模様。しかし、核分裂を阻害する兵器が光の速さ以上の速さで衝突、展開、そしてこの現状です。光の速さより速いためこの施設の監視システムでは確認がとれません。恐らくこの阻害兵器のおかげで施設、ひいてはこの地球が救われたものと思われます。ちなみに衝撃でカメラが全て破損しました。」

「(Tom) どうやら、この世には我々の科学を凌駕する組織があるようだな・・・よし！カーディール隊は私と一緒に現状確認、新監視システムの導入、並びに異常物の回収作業にあたる！！あと、放射能汚染の疑いがあるので『白づくめ』になること！！！！」

そして、Tomはガラパゴス諸島を探索し始めた。そう、ここであれが問題のあれが起きるのだ。

## アンパンマンTRANSIENT 03

「(Tom)・・・ん？なんだこれは？？」

そう言うとそれをかざして太陽を見てみた。

なんとなくだろう。

それは爆発したアンパンマン号の遮光板だった。

だが、次の瞬間・・・ピカッ！！・・・と何かが光った。

その光は遮光板を目にしていたTomの脳には作用せず、記憶が奇跡的に残っていたのだ。

基地内の人々も大丈夫であったが、カーディール隊はその後帰投する事は無かったという。

宇宙保全理事局の保管庫にしかないその情報は、Tomの頭の中にも存在したのだ。

今回の話はこの情報が何をもたらしたのかを語ることにする。

感のいい人ならわかると思うが・・・まあ、とりあえず続きを。

カメラが全部壊されたとはいえ、それまでのことは全て記録に残っている。

Tomにとってはそれだけで大抵の構造はなんとなくわかり・・・

つまり率直に言うとNEUTRON bomb発射型バイキンレー  
ルガンを実験型メイトの主砲に搭載しようとしたのだ。

だが、N邪魔の影響により何回試しても核分裂が起きなかった。

散々思考したのち、Tomはある考えに達した。

「(Tom)この地球は何か巨大組織に管理されている・・・ざつ  
と計算しただけでもかなり狂ってる兵器だというのに、軽々と押さ  
え・・・それ以前に一発で地球全域が核分裂不能とは・・・意味が  
不明にも程があるだろ・・・いつ地球が侵略されてもおかしくない  
というこの現状、なんとしても打破する必要がある!!!しかし情  
報が少なすぎる・・・あ、そうだと奴らはどうなった!？」

その頃、当の本人達は・・・

## アンパンマンTRANSIENT 04

「ふう・・・さあアンパンマン、この畑にある、たぶん美味しそう  
と思われるじゃが芋でコロツケでも作って食べてみるかのう？」

「ジャムじいさんよあー、これ本当にじゃが芋？」

二人がいるのはジャックと豆の木に出てくる豆の木みたいに馬鹿で  
かいじゃが芋の茎のそこだった。

「（アン）ってか茎じゃなくて木なんじゃないのか！？この木何  
の木気になる木」見たことも無い木ですから」

「（邪夢）いや！私は聞いたことがある・・・母さんの子守歌で・・・  
たしか、

『この世は細胞という名の小さな箱からできている

ある日神様は母親にClean this room!といわれ  
小さな段ボールに色々詰め込んだ

様々な部屋を片付け、ゴミ袋に箱を入れて捨てる

しかし、その都度回収時間前に姿を消す

気になった神様がゴミ袋の様子を影から見てみると、なんと生物に  
変わっていくではありませんか！

しばらくすると、それは歩いていき下界へ落ちていく

そう、我らは神の国の不思議な魔法からできた箱の固まり  
聖なる世界で生まれし生物

故に放射能と言う悪魔の息に取り巻かれると、魔法がとけ形質変化  
や突然変異を起こす

(二番省略、無駄に長くてすいません)』

という感じだったな(どの意味でも子守歌の範疇を超えてるだろ・  
・)。つまりさっきの爆発で突然変異したんじゃないな。ん?ってこと  
はわしも被爆・・・?」

「(アン)何いってんすかあゝ僕パンじゃないですか。」

「(邪夢)ばかもん!誰もお前の話などしとらんわ!!既製品のお  
前には放射能など関係な・・・いはず・・・」

邪夢は放射能、と言う言葉を数回連呼しているうちに自分が何か大  
事なことを忘れているような気がしていた。

だが、本人は・・・

「そろそろ痴呆の年頃なののお。イヤじゃイヤじゃ。」  
と  
思っていた。

一部始終をモニターで見たTomは啞然としていた。

「植物が急激に肥大化することはないし、万が一あったとしてもこの人たちが生き長らえるはずがないだろう！本当にこれが噂に聞く科学の裏番長、邪夢なのか？」

邪夢の科学力は言うまでもないが、裏社会では拉致未遂や買収工作が後を絶えない。

パンマン達を作った理由に自己警護も多少なりと入っていらしい。

しかし、あまりに知ったかぶりの幼稚な言動に、邪夢の身に何かしらの『操作』が行なわれたのではないかと不安を抱いた。

「(Tom)んー・・・よし、例の試作機を完成させる時が来たな・・・私が研究室に籠もってる間も奴らの監視を厳に。」

Tomが人間の思考回路ではノーベル賞が20回も受賞できる程の理論で埋め尽くされていた頃、邪夢とアンパンマンはこのじゃが芋を食べると体が大きくなることに気付き、『アンパンマンポテト(遺伝子組換?)』を体が成長する少年期にオススメと称し、発売した。

君は小さな頃アンパンマンポテトを食べたことはないかい？

それこそこれなんだよ！

しかし・・・

「（じじい）じゃが芋のどこに体を成長させる成分がハイツ取るんじゃー！消費者をだますのもいい加減にせいっ！訴えてやる！！」

と言ったじじいは近くにある『ベン・ジョニー法律事務所』へと駆け込んだ。

「だから！私は株式会社たかじん羸座建設に脅されて仕方なく鉄筋を他社の建築中のマンションから引っこぬいて経費を節約していたんですよ！！だから証人喚問は彼らにしてくださいよ！！」

「（ジョニー）ですから、私のところで言われてもどうしようもできませんと再三申し上げたでしょう！？国会の先生方、例えば元大臣の系宇公介先生に頼めばいいじゃないですか！！斡旋してあげますから・・・」

「・・・わかってますよ、あなたまで私を騙そうとしていることぐらい！他のところも同じことを言って・・・どこかに私が無実だと信じてくれる人がいないのか！！」

そう姉貴建築士がジョニーと口論を交わしていた。

「（ジョニー）と言うか窃盗罪です！！早く行ってきなさい！！！！悪は許しませんよ！！」

「（姉貴）あーあそうですか、わかりましたよ、あなたに相談したのが間違いでした！！」

「（ジョニー）あ、ちょい待ち！！相談料一万円払っててください！！！！」

「（姉貴）……………プチッ」

事態があまりよさそうじゃなかったなので、じじいは別の法律事務所を探すことにした。

そんなこんなで、TOMが装置の開発に成功、アンパンマン一行を連れてくる作戦に移った。

「(下っ端)コンコンコン・・・今日は！。邪夢さんいませんか？」

「(邪夢)頼むから日曜ぐらい寝かせてくれよ・・・疲れてんだからさ。ん？なんだ、アンパンじゃないのか。何のようだい？」

「(下っ端)今、噂になっているアンパンマンポテトってジャムさんが作ってるんですよねえ？」

「(邪夢)お！よく知ってるな。関心関心。」

「(下っ端)単刀直入に言います、あなたに詐欺の疑いがかかけられていますので、精密検査を受けてもらいたいのですが、ご同意して頂けますでしょうか？」

「(邪夢)・・・致し方あるまい。アンパンマンポテトの名にかけて、いざ尋常に勝負！！！！」

TOMの下っ端にまんまと騙されたアンパンマン一行はガラパゴス諸島地下の巨大都市　デルタワンに目隠しをされたまま案内された。

デルタワンは地下に埋まった半径1km球状のシェルターの中にTOMの軍事施設、それに携わる人達の生活都市があるのだ。

勿論の事だが、外の国々には知られていない。

衛星からも見えないうね。

「（邪夢）ってか何で検査なのにこんなに縄でグルグル巻きにされるんだ!？」

「（TOM）そんなに知りたいか？なら教えてやる……と言いたいが、その前にかかるく脳波を調べさせてくれ。」

キユイイイイイン……

「（邪夢）だ、だからといってワシの天パー頭を剃ろうと言うのか!?!クソツ!!縄が解けねえ……ぐっ……やめろおおおおおおおおおお!!!!」

邪夢の必死の抵抗もむなしく、邪夢の頭は波平へアーとなってしまった。

「（TOM）俺は優しいから、横つちよを少し残してやったよ……クツクツクツ……」

笑うのも無理は無い、想像して見よ、邪夢と波平の頭の融合を……

「（TOM）脳波を調べるには頭皮とセンサーを密着させる必要がある。そのためだ、我慢してくれ。」

しばらくして……

「（脳神経科医）やはり……脳の一部に記憶の欠如が確認されますね。どうやら、網膜からの強力な磁光信号により記憶を封鎖され

ているようです。予測できる攻撃物は何通りか考えられますが、共通することは、向こうの方達は『MIB』で出てくる『あれ』の理論を実用化しているみたいですね。」

「(TOM)やはりそうか・・・通りで邪夢の知能指数が一桁下がってる訳だよ!!あの幼稚さは凡人以下だからな。誰が見たって異常ってことがわかるだろ。」

「(邪夢)・・・お主等、さつきから何を喋っておるのじゃ?」

「(TOM)そろそろ本当の事を説明するか。お前さんの脳の記憶は消されているのだ。」

「(邪夢)はあ?馬鹿コケ!!」

「(TOM)馬鹿でも何でもいい!!とにかく、その消された記憶が必要なのだ!地球の外にもものすごい『何か』があるみたいなんだが、おそらく邪夢はそこ何らかの関係がある。理由は知らんがそれらの記憶は消されていて替わりの記憶が存在する。何か忘れているような気はしないか?」

「(邪夢)洗脳するつもりか!?確かになんか忘れていたような気はするが、私は年寄りだ!!そんなバグみたいなことおきても仕方ないだろ!!記憶を消されただあ?ちゃんとあるよ!!アンパンマンと一緒に・・・あれ?なんでアンパンと一緒になんだ??いつ会ったんだ???わからない・・・わからん!!!!!!」

「(TOM)それだよそれ!いいか?ここは騙されたと思ってしばらくじっとしててくれ。別に危害を加えるつもりは無いよ。記憶を復元するだけだ。」

邪夢は自分の過去があまりにも不鮮明なことにとてつもない恐怖を感じ、とりあえず流れに身を任せた。

一方のおやじは・・・

「（おやじ）ったく、なんでJAPANはこつも変なやつが多いのじゃ？少しはUSAを見習ってほしいねえ。」

実はおやじはアメリカ系日本人で、アメリカのじいちゃんち暮らしが長かったらしい。

ブツブツと文句を言いながら歩いていると警視庁舎が見えてきた。

あそこで道を聞くしかない！！

と思ったおやじは軽やかに小走りをしながら正門を通り過ぎた・・・かに見えた。

「ちよつとそこのあなた、止まりなさい！」

門番に声をかけられたが、大音量で「エキセントリック少年ボーイのテーマ」を聴いていたおやじには届いていなかった。

「ここで無視されたが100回目！！数々の叱責にも耐えてきたが、もう限界だ！シネイゴリアー！！！！」

腰に付けていた『重量型鉛警棒』を振り回してきた。

そんな異変にも気付かないルンルン気分のおやじに魔の手が着々と接近する・・・自動ドアに差し掛かったその時だった。

ドスツ！！かなり鈍い音がした。

さすがに気付いたおやじが後ろをみると、小さな奴が自動ドアが開かずに激突していた。

「（おやじ）おお！大丈夫かね、君！！今 ambulance を呼んでやるからしっかりするんだ！！」

そう、今まで無視されていたというのは、背が低すぎて視野に入っていないからだ。

門番が ambulance で運ばれていくのを見届けると再び庁内へと足を進めた。

庁内に入り、早速受け付けに聞こうと試みた。

「（おやじ）あのー、すみません！ー！弁護士事務所がどこにあるのか教えてもらいたいんじゃないが・・・」

しかし、とても騒がしい庁内にはおやじの声は届かなかった。

「（おやじ）すみませーん！おゝい！！・・・いい加減気付けよおおおおおー！！」

あまりの大音声に職員が切れ・・・

「（職員）うるせえええええんだよおやじ！！！！かっちは今脅迫電話が来てて忙しいんだ！！！！一般人は通すなどあれほと言ったのにあの門番は何してんだ！？今度こそクビだな！！・・・って事でお引き取り願おうか。」

「（おやじ）・・・わかった、なら地図だけでも・・・」

その職員はポイツ！と壁に掛けてあった地図に を付け、投げ捨てて戻ろうとしていた。

「（おやじ）あっ・・・自転車を貸してもらいたいんじゃないが・・・」

「（職員）撤去の中から好きなの持ってけ！！」

これ以上ここにいと公務執行妨害で逮捕される、と思ったおやじ

は急いで外へ出た。

「って撤去所ってどこだよ!!ああああああ!!もうやだ!!!!」  
と頭を掻きまわっていると、その自動販売機の前につきくぼーどを  
確認した。

当然のことながら鍵はかかっていない。

しかも幼児用のやつでハンドルが低く、制限体重30キロまで。

「30キロ? All right!!ワシは痩せてるから35キロ  
じゃ!!5キロぐらいどうにかなるだろ。ちよつと借りるぜ!ちや  
んと帰すから安心せい!!」

と、軽く自販を叩いて勢い良く漕ぎだして行った。

走りだすも、3歩で止まった。

「地図見なきゃわかんないじゃん！えーつと・・・・・・・・・・・・・・・・」

実はおやじが貰った地図は日本列島が丸々かかれた地図だった。

と言うか、正確に言うと日本地図付きカレンダー。

よく見ると、京都を全部囲むように が書いてある。

しかし、目の悪いおやじは、とりあえず高速にでも乗って京都あたりまで行けばわかるべさ！という軽い乗りで地面を蹴っていった。

ついに高速道路までたどり着いたおやじ。

しかし、借りたきつくぼーどが早くも壊れかけてきて、なおかつ料金所の人に、

「おじいさん？それじゃここは入れないのわかる？」

と痴呆かのように扱われてしまった。

仕方がないので大改造を頼むことに。

で、きつくぼーどを押しながら近くにあったサイクルショップSantaに乗らんだ。

「ちわあーっす！この機体でも高速に乗れるように改造して欲しいんですけど……ってあんたなんかおかしいよ！」

そこには真夏なのに赤い装束に身を包まれ、汗だくになっているヒゲもじやのむさ苦しいオジサンが暖かそうなこたつに入ってこちらの様子をうかがっていた。

「（おやじ）あんたヤバいよ！！ちょっとやめといた方がいいって……！」

「（オジサン）使命なんだよ。これは大事な使命なんだよ……GUUUUUwaaaaaa……！」

そう叫ぶと気絶してしまった。

「（おやじ）頼むから死なないでくれ！！せめて俺のマシンをいじってから逝ってくれ！！」

こうなったら助けるしかない。

そう言っておやじは全力でオジサンをこたつから引っ張り出した。

そのとき、オジサンは目をさました。

「（オジサン）いやあああああああ……！」

そう叫ぶとこたつの中に転がり入ってしまった。

「（おやじ）どうしたんだ急に！！せっかく引っ張り出してやったのじ。」

「(オジサン) やつが、やつが来るんだ……僕を殺そうと。」

「(おやじ) はあ?」

こいつボケてんじゃねえの?と思ったその時!!

「おおおおおおおお!!!!」

つと謎の唸りが聞こえた。

その瞬間!!

窓をつき破って婆さんが進入してきた。

「(オジサン) いやあああああああ、来たあああああああ!

「!!」

「(おやじ) 誰なんだあいつは!!」

そこには筋肉質な身長1メートル程度の気持ち悪いとしか言いようのない婆さんがいた。

「(オジサン) あいつは反粒子砲を放ってくる。そのせいで俺の村は崩壊し、その中で唯一の生き残りである俺を捕獲して拷問にかけているんだ。」

「(おやじ) ……って何故拷問にかける必要があるんだ?」

「(オジサン) それは……伝説のキツコーマン醤油の隠し場





「（おやじ）ナイスウウウウッ！！何をどう改造したんだ？」

「（オジサン）まあ、それは使ってからのお楽しみだ。」

そしてオジサンから高速道路の料金100円をもらい、突入を決意した。

そのころ邪夢は、TOMの所で頭蓋骨を開けられていた。

勿論、麻酔はかかっています。

「（医師）メス・・・頭皮開放・・・のこぎり・・・頭部固定・・・  
（キユイイイイイ）・・・こつからが勝負だ・・・」

そついうと邪夢のむき出しになった脳に極細の針を一部だけに数本刺し、横にあったパソコンと繋げた。

が・・・突如高圧電流が逆流し、パソコンがぶつ飛んだ。

「（TOM）ぐあああああああ！！バカヤロオオオオオオ！！  
！！あの高性能パソコンにいくらかけたと思つとんじゃ！！！国一  
つ動かせるんだぞ！！！！・・・チイツ、まあよい。これで邪夢を  
うちに入れる口実ができたわ。」

TOMは邪夢の記憶にも興味があつたが、それ以上にその軍事能力も欲しかったのだ。

せつかくTOMが部屋に籠もつて作成したパソコンもオシャカになり、考えるのがやになったTOMはスーパーコンピューター『パパドゥ』に回答を求めた。

直接人体どうしで行う双方向通信による障壁解除・・・成功率30パーセント・・・高圧電流で脳みそ沸騰するかも。

「(TOM)・・・そんな危ないこと自らやる奴いないだろ・・・次！」

本コンピュータのサブに無線リンクし、デジタル信号により自発的に障壁を取りのぞく方法・・・3パーセント。

「(TOM)3かよっ！！・・・次は！」

ありません。

「(TOM)・・・ないのか・・・まあ、後者に賭けるしかないか・・・」

ということ、ジャムは頭蓋骨を閉められ、禿げている頭皮を縫われて手術室を出た。

(邪夢の夢の中・・・)

「あれ？ここはどこじゃ！？・・・なんか書いてあるぞ。」

白い空間の足元には何故か明朝体で書かれたピンクの文字が流れていた。

「見にくい・・・見にくすぎるぞこれ！」

するとすぐさま黒に変わった。

「ソーリージャムサン！ワタシハ、アナタノ、ノウニデンパデツウシンシテルコンピューターデス。トムカラジジョウハキイテイマス。ワタシノイウトウリニスレバ、カナラズキオクハモドリマス。」



「(邪夢) くらえ！邪夢式バットウジユツ！！」

邪夢はただ歩いて横を通り過ぎただけなのに、二人は倒れていた。

「(邪夢) シャツ！！・・・ん？でもよく考えたら俺の両親はパンマン01に食われたはず・・・ふえいくやん！！！」

すると、間の前に走馬灯があらわれた。

「(宇宙保全理事局長) オッホン！邪夢殿、右は本試験にて、成績は満足できるものではないが、生物学実習において、未だ開発されていない大変極めて重要なバイオテクノロジーを構想し、見事実現したことを讃え、特別に局長特例第13条B項に従って地球駐在監査員長に任命す。第12754代局長、トーマス・キーカンシャー」

「(邪夢)・・・ああ、これはパンマン初号機を作って、長に抜擢されたときのやつじゃな。なるほどなあ、TOM。お前が言いたかったことはこれだったんだな。」

そうとわかった邪夢は駆け足で次の記憶へと駒をすすめるのであった。

邪夢はまだ手をポケットに突っ込んだまま爆走していた。

すると・・・

「(?) 邪夢おじさん！早く新しい顔をつくつ・・・グハツ!!!」  
まだ全部話し終えぬ間にアンパンマンはバットウジユツでやられた。

「(邪夢) これは全部夢の中だつてわかつてんだよ!!! 誰を出してきても無駄だ!!!」

また目の前に走馬灯があらわれた。

「すみませえん！邪夢さんいますかあ〜？外に貼つてある『従業員募集！応募条件 1、機密を保持できるもの 2、食物（特にパン）に異常な興味のある人 3、身の安全は保障できません、それに同意できる人 詳しいことは面接で。』を見たんですけど、なんかもうすぐくワクワクしちゃつて、どうかここで私を雇ってもらえないでしょうか？」

「(邪夢) あ・・・これは初めてバタア子が来たときのじゃな。そういうえば、こっちにきてからパン工場経営をしていたんじゃない！そうだそうだ。よく考えたら工場の留守番を頼んだバタア子達は今頃どうしているのだろうか？」

そんなことを考えながらまた手を突っ込みながら歩き始めた。数分後、ニューライザーにて精製された最後の記憶閉鎖野郎が向こう

側から現われた。

「ん？鏡か！？」

自分の姿が前方に映し出されていたので最初はそう思った。だが、その鏡に触ろうとした瞬間、

「ズコッ！！」

と鳩尾みぞおちに邪夢式バットウジユツを食らった。

その衝撃で数十メートル吹っ飛ばされ、かなりのダメージを食らった。

邪夢でなければ間違いなく即死です。

「……だ、だれじゃ……ワシが編み出したバットウジユツを使ったのは……」

「そのワシじゃよ。いいか、これは警告じゃ。今度近寄ったら消すぞ。捜し求めている記憶なんぞでーしたものではない。その道を進めば現実に戻る、そろそろ夢の中から出たらどうじゃ？」

「……（ブチッ）偽物のくせに調子乗るんじゃねえ！！！オリジナルに勝てると思っとなのか！！ずーずーしいのもいい加減にせい！！！！」

そう怒り散らすと手に気をため始めた。

「はあああああああ！！消え去れクソ野郎！！！！真のパン屋の

「こね力を思いしるがいい！」

邪夢の手によってコネコネされた高エルネギー体はもう一人の『邪夢』をも飲み込み消え去った。

わかりやすくいうと、邪夢の尋常ではない気にもう一人の邪夢がエルネギー化し吸収されてしまったのだ。

何とも恐ろしい技である。

そして、最後の走馬灯が現われた。

中身は記憶が消される直前のものだった。

そう、前作である『アンパンマン』の終わりの辺りだ。

徐々に記憶が復活するに連れ邪夢の視界はだんだん真っ白になっていくのであった。

「ザー!?!」(記憶が消される直前の『ニューラライ・・・』の続き)

そう叫んだ邪夢は自分の記憶が復活したことに少々戸惑ったようすだったが、TOMと医師がこちらに不自然な眼差しを向けていることに気付くと喋りだした。

「まずは礼を言おう、TOM。そして、意味深な言葉を発していたことについて詫びる!すまんかったな。しかし!もう大丈夫じゃ!何か聞きたいことがあったら遠慮なく聞いておくれ。知っている事ならすべて話そう。」

「(TOM)じゃあ質問、『あれ』やったことありますか?」

「『あれ』?」

「そう、『あれ』。」

「『あれ』って『あれ』か?」

「そうですね!『あれ』は『あれ』ですよ!やったことあるんですか?無いんですか?」

「返答に困った邪夢は・・・」

「.....ノーコメント!!--」

「(TOM)・・・邪夢さん、なんか勘違いしてませんか？最近日本で流行っている『無視キング』ですよ!？」

「バコツ〇(%)」

TOMは、おもいつきりテレビ並みに思いつきり殴られた(だから死なずに済みました)。

「(邪夢)んなことわかるかよっ!!おまえ馬鹿か!!!もう無いなら帰るぞ!!!!!!」

「(TOM)ジョークですよ、ジョーク。では、本題に入りましょう。現在、まあ見ればわかると思いますが、地球はあの戦闘のあと、今日に至る3年間、全ての核分裂反応が起きなくなってしまった。残念ながら衝撃で地上のカメラが破壊されてしまって、全くわからないので、事の真相をできるだけ詳しく語っていただけないだろうか?」

「(邪夢)なに!?!ビデオがあるのか!?!ちよつと用意頼む。何せ三年もクダラン事をしていたから忘れっぽくてな。見れば思い出すかもしれない・・・あ、ついでに紅茶　　アールグレイ頼むわ。」

見知らぬところにいるわりには図々しい邪夢を見て、少してきたが「情報のために」と我慢することにした。

「(邪夢)フムフム・・・ああ、これね。ワシもしらんわ。でもこの直後に宇宙保全理事局長がきたから、あいつらが何かを打ち込んだんだろ。核分裂しない?じゃあ、核分裂阻害弾とかそんな感じだろ。この後はドキンをモンスターボールで逮捕し、局長にニューライザーで記憶を消されるわけだ。にしても、局長には頭にく

るな。依頼された任務を完了したと勝手に忘却させるなど……」

「（TOM）ほう、じゃあ宇宙保全理事局って何なんですか？」

「この星は地球人が実質的に動かしている。この太陽系に他の高等動物がいないことは知ってるよな？大体一つの太陽系に文明が一つある。いくつかの太陽系が集まり銀河となる。太陽系がある銀河は5154銀河で、その中でも最も先進しているワシの星が監視員の指定を受けたのだ。今回はことが大きすぎて長であるワシ自身がここに来ているわけだが……。いくつかの銀河にそのような依頼をしているのが宇宙保全理事局。簡単に言えば、宇宙の平和を維持している、って感じかな？だが、奴らの科学力はワシ達と比べものにならないくらい極められている。死人も生き返らせられるって噂も残念ながらこのぐらいのことしか知らん。内部の事については何も聞かされちゃいない。まあ、怪しいと言えばそれまでなんだが。」

「なるほどねえ。」

邪夢はやっとここで、

「しまった！喋りすぎた！！局長に………って今更関係ないか。」

とアールグレイを睨りながら思った。

「(TOM)おそらく、邪夢の戦艦、ドキンの戦艦、アンパンマン号は破片しか見つからないので回収されたと思うのですが、あれらの動力源はいったい何なんですか？核エルネギーが使えなくなっただけで、そのシステムを使わないとこの『アルティメイト』は動くことができない……」

「(邪夢)ドキンのやつはしらんが、うちで建造したものについては宇宙保全理事局から『双転移エンジン』なるものの設計図をもらって、それを主動エンジンとして使った。確かここに……」

と言つと、スネと靴下の間から一枚の紙を取り出した。

結構湿っています。

「これが設計図じゃ。本当かどうか知らないが、真空と、より純度の高い真空の双転移によつて真空エルネギーを取り出してタービンを動かしてエルネギーを生み出しているらしいな。簡単に言えば、スーパースターリングエンジンって事かのう。」

「(TOM)素晴らしい！！エルネギー算出の観点で見ると、真空の純度が低いため大気圏内では核エンジンに劣るものの、通常航行には全く問題ない数値だ！邪夢さん！！これいいよ、これ！！これを作りましょう！！そして宇宙保全理事局とやらにももの申しに行きましょう！！」

「おっ！？あそこまで行ってくれるのか！！勿論じゃ。何でも協力するぞー！！」

こうして核エンジンに変わる新エンジンを作ることになった。

その頃おやじは・・・

ぴかぴかの原動機付ききつくぼーどを眺めながら、シーチキンおにぎりをむしゃむしゃと食べていた。

「やはりおにぎりはシーチキンに限るな！もうこれで十個目じゃ。」

そう言いながら地図を眺めていたわけであるが・・・

「んー・・・えー・・・んー・・・自分の視力を過信し過ぎたわい！」

地図すら読めないことにやっと気づいた。

すると、そこに一人の自分よりもはるかにしわの数が多い老人が現れた。

「そのの若者よ、地図が役にたたないわけではないのだ。ただおぬしの知力がちいとばかり低すぎるだけの話なのじゃ。そこで今回紹介するのはスーパーナビゲーションシステム搭載型携帯テレビ『東京みわさぶろくごみぱっぱ』だ！！さて、どこがすごいかと言うとこれです。ここについてるミカンみたいなやつを押すと・・・さあ、Let'sちゃんれんじー！そのお兄ちゃん、ちよいとこれを軽くぶっしゅしてみなさい。」

「（おやじ）兄ちゃんてのは俺のことかい？いや、参っちゃうな。」

気分が良くなったおやじは謎の老人の誘惑に負け、ミカンを押してしまった。

「トランスフォーム!!」

どこからか謎の奇声が発されたかと思っただ瞬間にはミカンと老人はいなかった。

が、おやじはこの時、戦いが始まることを感じ取っていた。

目の前には某ゲームに出演しているロックンみたいなやつと明らかにシマにしか見えないやつが立っていた。

「あれっ、君たち仲間だったか？」

おやじは素朴な疑問をなげかけた。

しかし、相手は一言も話そうとしない。

「おい、ロックン………ロックン………アアアアアン!!」

シカトされて激怒したおやじは一瞬のうちにロックンを撃破した。

「あれっ、良く見えないな。」

今更眼鏡をかけていないことに気づいてかけた瞬間、おやじは目を疑った。

そこには純粹に商品を販売していたただの老いぼれが倒れていたのだ。

「どこだ!!どこに逃げたロックン!!」

「ちょっと来てもらえるかな？」

「あっ、おまわりさんだ!!」

おやじは子供の頃の懐かしき思い出に浸っていた。

しかし、罪もない爺さんを自分が見ていた幻想によって死なせてしまったおやじにはそんなこと思い出してる暇はなく連行されるしかなかった。

だが、諦めなかった。

急に走りだすと颯爽ときつくぼーどに乗り込みひたすら地面を蹴った。

すると、仲間を呼びだした警察軍団はおやじの行く手を塞ぎはじめた。

「くそっ！！何か良い方法はないのか・・・何だこのボタンは、ウルトラマンの頭っぽいような気がするのだが。まあとにかく押すしかない。」

「・・・ピッ！・・・」

なんともいえないバーコードレジスターのような音色があたりに響きわたった。

すると、どこからともなく謎の物体が巨大化しつつあり・・・

「まっ、まさか！！ウルトラマンだああああああああああ！！

！！！！」

そして、それと同時に急に気持ち悪いやつがあらわれた。





そろそろ邪夢の方に話を戻そう。

邪夢の設計図は技術開発部第三課に引き継がれ、わずか一週間で完成した。

詳しい過程は別の機会に話そう。

動力源も確保でき武装もそれなりに揃った。

実弾ミサイル、あのバイキンマン軍の使っていた 波レーザーガン、左右の特殊砲である超対象性粒子砲2門（双転移エンジンから副産物としてでる暗黒物質を砲弾として使用）、あと地球周辺では使えないであろう主砲NEUTRON bomb・・・

まあ、ともかく一同は出発することにした。

「(TOM) 出航スタンバイ!」

「(OPその1) 本艦はこれより発進します、各員所定の位置に着いてください。」

「(OPその7) 注水六割がた終了、ゲート開きます。エンジン・各部所オールグリーン。」

「(邪夢) はっ!!!????注水六割で大丈夫なのかよ!?ゲートが大破して大変なことに・・・」

「(TOM)なァーに、ちよつと揺れるだけでたいしてかわらんよ。よし、アルティメイト発進!!その後五度の角度で浮上し、エンジン最大出力で一気に成層圏を抜ける!!!」

ゴオオオオオオオ・・・つと行きたいところだが、そこには偶然にも日米合同戦時演習が行われていた。

「隊長!海中から未確認物体出現!!何なんですか、この馬鹿デカイやつは!!!まるでアニメに出てくる戦艦じゃないか!!!」

(注:そうです、アンパンマンですから)

「(カール大佐)え、演習中止!!これより日米両軍は直ちに未確認物体の破壊、無力化を目標とする!」

「(一同)い、イエッサー!!!!」

Buuuuun・・・Zudadadadadada・・・

「か、カールのおじさん!!!全然きかないっすよ!!!!」

「(カール大佐)バカモノ!おじさんではない!!!日米艦隊、全砲門を開けえええええええ!!!照準未確認物体!!!撃てええええええええ!!!!」

電解フィールドを張っていたアルティメイトには効くはずもなく、退避指示を出さなかったカール大佐一行は離水による激しい大波に飲まれ艦隊の3分の2を海のスズクにしてしまった。

多大な被害を与えたアルテイメイトはそんなものに目も向けず前方30度の角度で大空へと姿を消していった。

ちょうどその頃・・・

「（おやじ）よしっ！何がよしかよくわからんが、とりあえずおまわりさんが来ないから大丈夫じゃろ。」

すると、いきなりおやじの胸ポケットからマイケルジャクソンの『We are the world』が大音量で流れた。

「なんだよこれから長い旅路へ出るというのに・・・はい、もしもし?」

「大変だ弟よ！！未確認物体が成層圏外にしようとしている！！今『あれ』を使わないとんだ恥曝しになるぞ！！いいか！迎えのジェットをその道路に付けるから、早く国防本部に戻れ！！！！」

「はい？その道路つつたつて・・・うわあああああああああああ  
ああ！！！！！！」

バキバキバキバキっ！！！！！！

高速道路の向こうから中央分離帯と一般車両をクッションにして米軍最新鋭戦闘機『F-20m』が向かってきた。

「わかった！わかったから俺を殺さないでくれ！！！」

老いぼれには無理な100メートルダッシュを13秒で走り、かろうじて横道に逃げ込むことができた。

F-20mは料金所にぶつかって止まった。

さすが日米安全保障条約、有事の際は中央分離帯をモゴウが、料金所を壊そうが一般車両を引こつが許されるのである。

「もつしもーし！？生きてるか弟よ。早くそれに乗って来るのじゃ！！マツハ20であるからあつという間につくぞ！」

そう、おやじには兄弟がいて、その兄はアメリカ国防長官ラムズフェルルだったのだ。

どうやら、アルティメイトが宇宙圏に出ようとしているので、アメリカ軍秘蔵の『あれ』で落とそうということらしい。

なぜおやじが選ばれるかというと、『あれ』の解除キーを持っているからだ、兄と弟で。

なぜ大統領じゃないかって？

そのぐらいわかるでしょ、君。

当時アメリカ大統領であった常時物資、いや失礼ジョージ・ブッシュは大の戦争好きで、彼にキーを渡すと、

「テポドンなんて今や鉄クズなんだよ！！見るがいい、我が合衆国の力を。死ね！ノースコレア！！！」

と言う事になりかねないので、こういう結論にいたったのである。

誰か・・・誰か彼をどうにかしてくれない？

そんなこんなでおやじはアメリカ国防省へ到着した。

「（OP）現在、太平洋上空を高度8000で飛行中、追跡戦闘機からの映像……でません！！八個小隊全て落とされました！」

「（ジョージ・ブツシ）ナニユイ！？んな馬鹿なっ！32機一瞬でか！？こんなのにゆあるに載ってねえーじゃないのよっ！！！」

「（ラムズフェルル）大統領？まにゆある、とは何のことで……？」

「い……いや……これは何でもないよ……」

この時その場にいた誰もが、彼が『世界の戦い100選』という本を後ろに隠したの目撃した。

「（おやじ）……もしやお前さんが起こした戦争は『あの戦い』の真似をしたかったからなのか！？」

「あは……あははは……」

管制塔内に聞いてはならないような事を聞いたような重い空気が流れた。

「（ラムズフェルル）ま、まあこの件は後にして！今はあの未確認浮遊物体に対処するべきです……！」

「(ブツシ)そ、そうだな、そんなところ悪いんだが、用事を思い出したから後をよろしく頼むよ・・・」

『世界の戦い100選』を抱えてそそくさと足早に立ち去ってしまった。

「(おやじ)・・・いいのか？こんな緊急事態に大統領が不在で・・・また後でマスコミに『ゴルフしてた』だあ騒がれるんじゃないの？」

「(ラムズフェルル)いいのさ、あんな奴いたところでどうにもならん。もともと指揮権は私にあるようなものだ。大統領という肩書きさえ付いてればいい駒になる。ところで、あれの所属はどこかわかったか？日本か？ロシアか？アルカイダか？」

「(OP)いえ、どこからも声明は出ていません。」

「まさか、『あそこ』絡みじゃなからうな？」

「はい、エリア51は全く関係ない、とのことですよ。」

「馬鹿モノ！！部外者のいる前で名前を出すな！！！」

いやいや、部外者がここに居る時点でまずいと思いますが・・・

「(ラムズフェルル)まあ、よい。所属不明となれば実行行使に出るまでだ！！だが、あいにく先程追跡中の戦闘機が全滅し、今から上げて追いつかない。でだ、お前のもってる鍵が必要なわけだ。」

「(おやじ)わかったよ。じゃがその代わり、スタミナ井おごってもらっからな。」

「（ラムズフェルル）はあ？そんなことをこんな時にここで言ったからには極盛り完食できなかつたら殺すからな。」

「（おやじ）あたボーよ！じじいに二言はねえ！！！」

こんなことを公言したがために、後日おやじはラムズフェルルにボコボコにされるわけですが・・・その話はしなくともわかるでしょ？

アメリカ航空宇宙局 通称NASAと呼ばれる組織はこの時代の宇宙でも圧倒的な科学力で群を抜いて支配権を握っていた。

地球近辺には数多くの衛星があるが、アメリカの衛星は凄まじく、赤外線で地上の建物の中にある、誰かが吐き出した梅干しの種が確認できてしまう。

当時から軍事的要素を含んだ衛星だろうと噂されていたが、実際には太陽エルネギーによって2連射可能なプラズマ砲を撃てる巨大砲門を内蔵していたのである。

2連射しか無いのだった？

馬鹿にはいけない。

一発あたりのエネルギーは日本で発電される一日の電力の10倍以上と言われている。

ただ、地上に照射すると国が丸々クレーターとなるので国土の戦争目的ではなく、万が一の異星人の侵略に備えた兵器となっている。だが今までに一度しか使用されたことがなく、その影響によって地球にもたらされた史上最大の磁気嵐も『太陽フレア』として事実をねじまげて発表しているため、噂でしか無かったのだ。

まあ、噂と言えど各国軍の間でもその存在は暗黙の了解の域だった。



場所はかわり、アルティメイトは大気圏を脱していた。

相談の結果、宇宙保全理事局まで直接行くのは物資的にも情報量的にも無理ということが分かり、邪夢の星を経由することになった。

かといって、アルティメイトを最大出力にしたところで、着く前に皆死んでしまう程遠く（何てったって太陽系の外ですから！）、普通の航行では着くはずが無い。

しかし、邪夢達は現にそこからこっちにきているのだ。

そう、彼らは何かを忘れていた。

しかし考えてる暇もなく・・・

「（ラムズフェルル）あーだこーだ言ってるうちに奴らは地球圏外に着いたぞー！！」

「（OP）NASAからの通信、シグナルオールグリーンだそうです。」

「（おやじ）撃つべえ〜撃つちゃうべえ〜!？」

「（ラムズフェルル）よしっ！プラズマ砲宙域で展開後、未確認飛行物体にオート照準！！カウントダウン開始！」

「（OP）・・・・・・4・・・3・・・2・・・」



ところが・・・

「（一同）遅ッ！！！」

こちらのハモリ具合の方がすごかった。

予想以上に弾が遅く、停まっているかのように見える。

「（ラムズフェルル）どうゆーこっちゃい？君らは私たちに喧嘩うつトンのかね??」

「（NASA職員）めっそおおおおも御座いません！！弾を打ち出すための電解バネが劣化のため焼失してしまい・・・」

「（ラムズフェルル）また点検ミスかつ！今日という今日は我慢の限界だ・・・次ミスったら事故死に見せかけて秘密裏に殺すからな！！！！」

「（NASA）はいつ！・・・・・・（はは、まぢで笑えねえ・・・）」

「（少年）ねえ父さんこれは！何かあそこかなり光ってるよ！！！」

「（父親）ったくしょーがねえーなあー。どれどれ？」

また衛星と星を見間違えたか？と思いながらもテレビから離れ、子供の望遠鏡を覗いた。

「（父親）・・・マブツ！！なんなんだこれはっ！！！」

一見彗星に見えなくもないが、何かが明らかに違った。

全く動かない様子を不思議そうに見る親子・・・

テレビはちょうどスーパーニュースのズバリお天気！だった。

「（安藤さん）良純さん、昨日の天気大分外れましたよね？」

「（石腹良純）昨日の天気い？天気予報なんて外れるもんなんですよ！！僕だって天気のこと何かわかりませんよ。・・・さて、明日の天気、まずは気象衛星ひまわり85号からのリアルタイム映像です！」

3年前、邪夢がひまわり84号を擦って壊してしまっただため新たに打ち上げられた85号。

この時代になっても日本は平和主義を貫いていたため武装は施されていない。

「（良純）ここらへんにある雲がだんだんこっちに流れて・・・」

ドッカーーン！！！！

「（少年）あ、何か爆発したよ！」

「（良純）っ！……！何で画像が消えたんだ！？」

「（父親）うひょひよっ！あれがひまわりに当たってまたぶっ壊しちゃったんだな……ありやまあ。」

「（OP）衝撃波、来ます！」

「（アンパンマン）ぐああああああっ！……！」

シートベルトを締め忘れたアンパンマンは吹っ飛ばされたが、頭がクツションの役割を果たしサhod痛くはなかったらしい。

もつとも、裂け目からアンコがちよつと漏れてしまったが……

「（TOM）ったく、アメリカは何処までも間抜けだな……！」

「（ラムズフェル）あふおかあああああ！日本の衛星壊してどうする！！あいつらをおとせっちゅーとるがな……！！よしっ！もう一度撃つぞ！！うてええええい！奴らを滅殺するのだ……！」

今度はさすがに勢い良く発射することが出来た。

だが、依然重力弾がバラ撒いてあるのでアルティメイトはただ静観していた。

ゴオオオオオオオ……

ぐによっ・・・

ゴオオオオオオオオ・・・

ドッカーーン！！！！

さすがのラムズフェルルも言葉が出なかった。

「（おやじ）何かに進路妨害されたのはわかった。だが、何故こうも悪いことだらけ起こるんだ！？」

なんとプラズマの球体は重力弾に引っ張られ進路が狂い、あるところか月に肉眼でもわかるほどのクレーターを開けてしまった。

「（邪夢）あーあ、今ので月のウサギさん達は無くなったな・・・あれ？月・・・そうだ！確か地球にきた時月の裏側に加速機を格納してきたんだ！！TOMよ、あれを取りに行くのじゃ！」

邪夢達を消そうとしたプラズマ砲は皮肉にも邪夢に忘れていたものを思い出させてしまったのだった。

邪夢の乗ってきた加速機      オーバーブースト。

通常加速を遥かに超える出力を出せるためこの名が付いた。

通称おばぶー。

光の速度を超えた速度、所謂ワープをするために必要なため実質光より数段上である。

詳しい話は終わりの方になるが、ブラックホールが形成されるに至る状況が解明され、人工ブラックホールが誕生した。

ブラックホールと言うものは超重力過ぎて光すら飲み込む程の超大星が中核をなのだが、実は時間の経過をも飲み込むため距離的概念がなく、おばぶーでその重力に勝る出力を出して航行さえできれば一瞬で通過できる。

まあ、おばぶーが何らかで異常を来すと一発で引き込まれ虚数空間に吸い込まれていき……

ま、とにかくブラックホールとおばぶーはSFの夢、ワープの実現に至ったわけだ。

だってさ、何万光年先の星に行くなんて生身の生物には無理な話だろ？

もっとちょー簡単に分かりやすく例えるならば、『ドラえもん』ど

こでもドア』だ。

あの薄い一枚のドアの隙間に無限に広がる虚数空間があり、あのドアを通過するにはおばぶーで超光速で突っ込むわけ。

宇宙保全理事局は円滑に活動が行えるように一つの恒星郡に一つないし二つ人工的にブラックホールを配置し数日で行けるようにしたのである。

じゃないと駐在監視員など派遣することなどできません。

ともかく、おばぶーでアルティメイトは邪夢の星へむかうことになった。

## アンパンマンTRANSIENT 24

おばぶー駆使しまくったおかげでブラックホールで迷宮入りせずに邪夢の星近辺まで来ることができたTOM達一行。

だが・・・

「（邪夢）こちら5154銀河駐在監視員の邪夢だ。管制、着艦許可を頼む！」

「・・・」

「長である私が言っただから無視すんなボケエ！！」

するといきなり周りに潜んでいた紫色のUFOに囲まれた。

「（アンパンマン）ま、まさか・・・」

他のぱんまん一同もそう思っていた。

だが、邪夢は違っていた。

「誰じゃ！私の地下研究室の奴を呼び起こした馬鹿つたれは！！」

「（OP）通常通信です！」

「（研究主任）邪夢・・・さんですか！！生きてたんですね！保全部理事局から殉職の報が入りまして、まさかあの邪夢さんが負ける分けない、と思っただけですよ！」

「詳しい話は後だ！とにかくこの状況を手短かに説明してくれ！」

「邪夢さんがドキンの件で旅立たれことで急激に軍事力が低下したため、我々職員は軍事力不足を補うため邪夢さんが考案していた『JAM』の配備を可決したのです。しかし、ご存じの通り人口の八割以上がご年配の方々ということ今日この頃、精神的な水準を満たせる者などいません。アニメでありがちな子供をパイロットにするというのは人権委員会から許可が下りず、仕方なくAI開発をすることになりました。で、先週AIによる起動実験を行ったんですが、突然原因不明の暴走が始まり隣にある邪夢さんの家ごと踏み潰してしまい、恐らくその衝撃で目を覚ましたのかと。」

「よし、わかった！じゃが・・・手短かっていったよな？今度のボーナスカットね。」

「そんなあゝ全自動家政婦ロボットをボーナス一括払いにしたのに・・・（ずだだだだだ・・・）」

「ん？今銃声が聞こえなかったか？」

「今奴らが研究所を制圧しようとしてるんですよ」

「はあ？こんなゆっくり話してる余裕無いだろうが！！だから痴呆主任って言われるんだろ！！今からそっち行くから待ってる！」

すぐに研究所には行くといったものの、依然周りには明らかにバイキンUFOにしか見えない物体が漂っていた。

「（アンパンマン）邪夢おじさん！あいつは死んだはずでは……？」

「（邪夢）仕方が無い、話してやろう。わしが作った初号機、パンマン01、まあバイキンマンであるが、あれはこの星で作ったものじゃ。で、液体漬けにして置いた訳である。ところが、学会で発表したところ研究材料にしたいと連絡が相次いで早急にクローンをつくることになった。勿論、金はたっぷり取ったよ。だってよく考えておくれよ、どう考えたってあんな小さなパン工場経営でアンパンマン号とか戦艦とか作れるわけ無いじゃん。で、ワシが地球に派遣されることになってオリジナルを地下研究室に封印し代わりにクローンを地球に運ぼうとしたわけじゃ。だが荷造りのとき手違いで研究中の新種の菌類を培養していた液体の中に両方とも入れてしまつてのう。オリジナルを優先して瞬間冷凍処理を施したんじやが、時間がクローンの覚醒までに間に合わず……気付くとすでにそこにはなく、勝手に動きだした奴はワシが乗るはずの目的地が地球にセツトされているシャトルに乗りこんで行ってしまった訳じゃ。そこで運が良いのか悪いのか要注意観察対象であるドキンに拾われてしまったおかげでややこしくなつて……」

「（TOM）ん？つてことは暴走したJAM同様、周りのバイキンUFOはAI搭載無人兵器つて可能性が高いわけだよな？？OPP！  
！光学映像の拡大頼む！！！」

「(OP)はい……でました！やはりバイキンUFOの中には誰も居ませんね。」

「(TOM)ってことで……！』ぱぱどうー』よ……！敵兵器のAIにハッキングしてデータを書き換えてくれ！あ……オリジナルバイキンマン捕獲ってね。」

「ぱぱどうー(リョウカイシマシタ………カ  
ンリョウシマシタ。」

「(TOM)さすが、早すぎるよ……俺も脳味噌電脳化しようかなあ。」

こうして、クローンバイキンマンのようにドキンの手によって核起動化されていないオリジナルバイキンマンはアンパンマンと同じように顔が「パン」なので、いとも簡単に捕獲された。

無事バイキンマンを捕獲し平和が戻った研究所、だが新たな脅威が待ち受けていた。

それは・・・邪夢の挨拶回り、作戦の報告、今後の対策、査問委員会からの呼び出し、オリジナルバイキンマンの処置・・・

問題が山積みである。

そんなことを隅から隅までここで話しているといつまでも終わらなくなってしまうので、ちょっとまとめて軽く話そう。

何せ音信不通になってから数年がたち、挙げ句の果てに宇宙保全理事局からの殉職通知がくる始末。

当然葬式も行われていた、盛大にね。

近所の人にはご迷惑おかけしましたとおいしいパンを配り回り、査問委員会へ作戦を遂行したが理事局に捨てられたことを話し、会議を開き直接宇宙保全理事局に乗り込むことを承認してもらい、臨時の予算を得た。

その予算で開発されたのがロールパンナと新型JAMだ。

邪夢が地球で開発したJAM3（じゃんくしょん・あひゃあひゃ・まいんど・すりー）だが、研究所に置いていった構想中のデータから別の系列のJAMが作られていたのだ。

思惑はわからないが、表向きは軍事力低下で危惧される防衛力の増強、首都防衛の要ということらしい。

順番どおりに名付ければJAM4となる。

だが、構造が根本的に違うのだ。

JAM3の構造は特殊なパンで造られており、パイロットの精神力の強さに比例して強靱になっていく。

一方のJAM4は、少しでもパイロットの精神負担を減らすためにただのパンから装甲の強化を図った。

特殊製法により4y（単位：ヨクト、10の-24乗）レベルでの小麦粉結合に成功し、ダイヤモンド並みの結合に成功。

だが、相変わらずパイロットとの強力な精神リンクが必要で、世間一般の人では腕をピクつかせるくらいがいいところ。

そして！

何が決定的に違うか、それは具現化可能なKSユニット（かなり・すげえー・ゆにっと）が取り付けられたことだ。

ネーミングセンスなさすぎじゃないかって？

いやいや、本当に『かなりすごい』んです。

おばぶー等の特殊機器の素となっている双転移エンジン、これを使いわざと不安定な空間を作り出し、装甲のヨクト小麦粉、強力な妄想精神で、思い通りの物体が生成出来るというとてもないもの。

勿論、デメリットもある。

妄想癖レベルに頭が働かないと、「大砲」をイメージしたところで「ちくわからチヨコボール」になってしまう危険性。

爆薬とチヨコボールでは話にならない。

それどころか、精神が弱いと逆に飲み込まれ、自我を失い植物人間になりかねない。

精神、肉体、そして豊かな感性は必須・・・

ま、要するに邪夢みたいにはんまんとかを作れる「ふいーりんぐ」の持ち主ではないとイケないのだ。

各国にはさらなる科学力の発展と称して「発想力推進プロジェクト」なるものを実行させているため、一億人に一人ぐらいは邪夢並みの人間が出てくるようになり、パイロットには困らなかつた。

他にも改善点が二三、といっても細かいもので、湯呑み茶碗がせつとできるくぼみと自動みかん皮剥き機が付いた。

これで搭乗者はよりリラックス出来ることであろう、という計らいらしい。



いくら邪夢でもぱんまんの体から細菌だけを抜き取るのは不可能で、仕方がなくそれと相反する物で相殺しようと考えた。

「あの細菌・・・たしか塩ベースで作ったよな・・・?となると反対となるものは・・・sugarしかねえじゃねえーか!」

というわけで、アホかと言うくらいsugar塗れの小麦粉をコネ、頭を作った。

しかし、まだ問題はある。

それは潮風だ。

多少なりでも風に乗って塩がパンに吸収されるとたちまち菌が蠢き始め、暴走状態となる。

そこで!

その顔に塩分をカットできるような特殊な布をグルグル巻きにすることによって、通常生活が出来るようにまで改善できたのだ。

このグルグルさ加減が「ロールパンナ」と呼ばれる由縁。

ちなみに、戦闘中にロールがとれてしまった場合、メロンパンナが顔をロールパンナに押しつけることにより外側に塗してあるsugarが吸収され一時的に中和状態が保たれ、その間に飛んでいった布をアンパンマン達に取りに行き、再装着されるってわけ。

それにしても毎回思うのだが、なぜ邪夢はこいつも暴走する危険性のある不良品ばっか作るんだろうね?

あ、邪悪な夢と書いて邪夢だからか!!!

そんなこんなで新たな仲間と新たな兵器を調達、まあここから先はおぼろで長い旅路なので途中省略。

何もなかったかと言えば嘘になるが、別に大したことは無いです。

艦内除湿機がブツ壊れて、パンが湿ってロールパンナが暴走するも他のパンマンは力が入らずぶっ倒れて使い物にならなかったり（AM4大活躍）。

アンパンマンが100倍出力にウルトラダッシュモーターを改造し、しかも邪夢特製ミニ六駆を

「軽量化だああああ！チタンシャーシだからAll right！  
！」

とか言つて三駆にしてしまったため、100倍の重みに耐え切れずシャーシが折れ、凄まじい速さと摩擦により強速の火の玉と化し、エコロジー主体な邪夢の意向で内装木製で、敵の奇襲を受けたわけでもないのに動力部炎上、完全停止・・・

重力機関も停止し艦内が完全無重力になり、ワカメちゃん並みのパンチラ度を余儀なくされたメロンパンナが激ギレ、アンパンマンの顔が幾度となくミンチにされ邪夢が作り直して過労で倒れたぐらい。

くだらないでしょ？

そんなんで、宇宙保全理事局宙域に到着。

あ、その前にこの話をしておこう。

その昔、次の仮説が生まれた。

「我々が一つの電波を発生させるとき、二つの波動が放射される。」

一つは時間を順行する先進波であり、もう一つは時間を逆行する後進波。

通常空間では、後進波は先進波に打ち消されてしまうので、先進波だけが出ている、と言うものだ。

その結果時は進む。

更に言うと、『無』という何もない状況に表れた一次元の超高エネルギーが、先進波と後進波が等量の止まった『無』から『有』つまり先進波が後進波に勝った、宇宙と言う空間をつくり・・・

その何らかの超高エネルギーはほとんどが先進波に変換され、数値化できないほどの初期宇宙の時の速さ（先進波が時間の正ベクトルとなるため）が、だんだんと後進波に干渉され宇宙の膨張速度が落ちていき、やがて宇宙は膨張をやめる、即ち時間が止まる。

その後は後進波が先進波より勝り、時間は負のベクトル量となり、時が未来ではなく昔に後退するというわけ。

おばぶーの時説明を端折ったので、ここで説明しよう。

ブラックホールは超重量のため光さえ逆らうことのできない重力空間であることで有名だが、そもそも光とは粒子が先進波に乗って進行しているものであり、近似的に先進波と後進波が同値なブラックホールは一時的な「無」と考えられ、即ち時間が止まっているから光は進めないわけである。

時間が止まっているのになぜブラックホールは肥大化するのか、それは「無」の中に突然変異的に出来てしまった、風船みたいな宇宙に穴が空いてそこから「無」が侵食しているのがブラックホールと呼ばれるところであり、肥大化と時間は関係が無い。

となると移動手段と考えていたブラックホールとおばぶーの組み合わせは光をも超える超高速、つまり「無」が侵食できない領域の高度の先進波を放出するため、先進波の障壁が形成され辛うじて航行出来ていたわけである。

ちなみに、ブラックホールは「無」なので距離的概念は存在しない。

時間という概念の前には空間的な位置は意味をなさないのである。

障壁さえ展開してあれば一瞬のことであるが、障壁が不完全だと時の無い「無」に晒され（どうなるかは知る由が無い）、絶対に出てこれないため虚数空間と形容されることもある。

そもそも空間移動とは時間移動と同意義で、簡単に言うと、人が歩

く時、食物から摂取したエネルギーを先進波に変換しているため動ける、即ち微弱ながら未来に行くことになる。

だって、例えば歩いて10分かかる場所に、走ることにより先進波の出力を上げれば3分で着き、単純に考えれば7分後の未来にいるわけ。

宇宙に行つて戻ってくるとタイムラグが生じるのも同じ理由、ちゃんと相対性理論も含まれている（説明は省略）。

確か話のどっかで、

「過去へのタイムマシンなんかありえない」

と言ったが、理論上は先進波と後進波が調整できる空間が作れば無理ではない。

実際おばぶーがブラックホールに突入する際、双転移エンジンで先進波の絶対障壁を作っているわけだが、残念ながら後進波の障壁はつくれていないのだ。

そうそう、そう言えば科学はついに宇宙の向こう側に行くことができたらしい。

最もおばぶーを展開していたため宇宙の反対側に飛ばされてしまっただけのことだが。

ちなみに、相転移エンジンの由来は真空（これが先進・後進の波の世界）から先進波をエネルギーに転移させ、またエネルギーを先進波に換え障壁を張れることからそう呼ばれた。

それは有用性、安全性、効率性を始め原子力を遙かに凌ぐ力であり、宇宙保全理事局が発足される前に銀河系がいくつも吹っ飛ばすような超大規模の宇宙戦争があったことは言うまでもない。

だって、太陽系や銀河が作られるほどの無限で莫大なエネルギーだからね。

結局のところ、「無」というのはいわゆる時間の垣根を持たない次元、四次元空間であって、宇宙は先進波の巨大な障壁で卵の殻（厳密には部分部分で先進波がエネルギーに変換され、星が出来ているためウニのようにトゲトゲしていると考えられる）で保たれているわけだ。

で、何でこんな話をしたのかというと、この事実をついに宇宙保全理事局導きだしたからである。

「無」がブラックホールより侵食し、しかも全宙域の先進波の出力が低下し後進波が勝り、膨張が止まり（宇宙は弾性運動、つまり先進波動力のゴム運動）、この世界が今まで歩んできた歴史を逆行することになった場合・・・

だれしもそんなことは考えたくなかったが、実はその時が知らぬ間に目前へ迫っていたのである。

人類がどれだけ費やし続けても分からなかった「宇宙が存在する空間はなんなのか？」という問い、人はその答えを知らない方が幸せだったのかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7869a/>

---

新説アンパンマンTRANSIENT

2010年10月28日03時59分発行